

ビバハウス便りNO81 仁木長寿園・やすらぎの里で北星と共同で雪像作り

ビバハウス 責任者 安達 俊子

2月に入り、すでに立春も過ぎたのに、今年は例年になく、連日ものすごい雪と寒さ。ビバハウス設立当時、仁木町の北星余市高卒業生の親御さんの岩佐さんのご好意と、多くの方々の募金でプレゼントして頂いた、13馬力の「ホンダスノーファイター」という名前からして恐ろしい威力を持つ大型除雪機なしには、一日たりとも安心して暮らせない。

この冬の厄介の種、雪と寒さを、喜びの種に変える何かが出来ないかと考えた。丁度この時お隣の仁木町の老人施設から、雪像作りの依頼が来た。今年の干支の「辰」の像を作ってほしいとのことだ。ところが今年のビバは、昼間は働いているメンバーが大半になり、少し人手不足。日頃交流のある北星余市高の生徒の皆さんにも参加を呼び掛けた。生徒さんたちは、卒業試験を終え、判定会議を待つ身なのに、いくつもの寮、下宿同士で呼び掛けあって、2月9日当日午前10時に、猛烈な吹雪にも負けず、8人も集まってくれた。

ビバハウスからは若者とスタッフ8名で参加、総勢16名の集団が出来た。作業は施設で準備して頂いたおいしいお昼をはさんで、ほぼ午後2時まで。グループホームの方は完成させ、隣接の特別養護老人ホーム『長寿園』の巨大雪像の骨格作りを終了させた。(辰の像については、2月14日づけ朝日新聞に報道され、ビバハウスHP. ~「安達俊子」からも検索できる~にそのまま掲載しているので素晴らしい芸術作品をぜひご覧頂きたい。)

両施設のお年寄りの皆さんは、それぞれ食堂の一番外の見えやすい場所で、猛吹雪にも、寒さにも負けず必死に雪像作りに取り組む孫のような若者たちを、頼もしそうに微笑みながら見守っていた。作業終了後は、暖かい会場で、お年寄りの皆さんと若者たちの交流の場が持たれた。お年寄りとお年寄り一人づつが組を作り、施設の指導員から出された5つの質問を若者がお年寄りにたづね、その内容をみんなに若者から紹介するゲームだった。『これまで一番うれしかったことはなんでしたか?』などの質問から、長い人生を生きてこられたお年より一人ひとりの人生の姿が想像させられた。また『長生きの秘訣は何ですか?』との質問には、それぞれの皆さんが、きっぱりと、『くよくよしないこと。』と即座に答えていたのが強く印象に残った。最後の質問、『今の生活についての感想は?』には、すべてのお年寄りから、ニコニコ顔で、『みんなが親切にしてくれるのでとてもうれしいです。』との答えが返ってきた。

夫の友人で、早稲田の先輩、「サンデー毎日」編集長だった方が、岩手県沢内村(現在は村名が変わっている)で知的障害者のための施設を運営されているが、『両親を他人(ひと)に預けてボランティア』という表題の本を出されたのを新聞で見て、びっくりしたことがあるが、私のもうすぐ97歳になる母も『やすらぎの里』の皆さんがしっかりと受け止めて下さっているので、初めて私たちもビバハウスの活動に専念できるのだ。改めて、皆さんへの感謝と母の長寿といつまでも皆さんと仲良く暮らしてくれることを祈るばかりだ。

多くの方々の暖かいお心ずかいでいつもビバは支えられていることをこの寒さの中で実感している。『一步一步踏みしめるごとの暖かさ小見山さんの編んだ靴下』故ハナさんに。

